



MfG\_J\_Ishou-gura

衣装蔵の装飾、文様、建築について  
まとめました。

「こういう解釈も成り立つのでは」、ということで  
ご覧下さい。                      2024年5月

## 1. 衣装蔵の装飾

(1) 軒下、鉢巻部の葡萄唐草文

(2) 四神

(3) サフランの故郷、地中海・西アジア地域への憧れか

## 2. 葡萄唐草文様の意味

## 3. 源流のいくつか

## 4. 幼い四神

## 5. 建築の特色

鬼瓦、高床構造と通気口、高強度建築、  
亜鉛メッキ鉄板で漆喰壁を保護

# 1. 衣装蔵の装飾

## (1) 軒下、鉢巻部の葡萄唐草文



地震の亀裂が進み、殆ど剥落してしまいましたが、その前は、どんなに豪華だったことでしょう。

葡萄唐草は四神と同列、あるいは、それ以上の位置付けをもっていたかも知れません。

葡萄唐草文は鏝絵蔵に引き継がれました。



## 葡萄唐草文を取り入れた時期

- ・葡萄酒の製造・販売への参入

日露戦争(1904年2月 - 1905年9月)の戦勝  
祝いの記念品が好評で、市場参入

- ・衣装蔵の建設(大正5年, 1916年)

しかし、大看板(1912年ころ)に、この葡萄唐草文は  
ありそうで見えない。

葡萄唐草文は、葡萄酒の製造・販売から考えたか。

## 装飾、文様の採用時期

- |                |                        |
|----------------|------------------------|
| ①大看板(1912年ころ)で | 蛮人、双龍                  |
| ②主屋改築(1913年)   | 鬼瓦に双龍                  |
| ③衣装蔵(1916年)に   | 四神、葡萄唐草文               |
| ④鰻絵蔵(1926年)で   | 四神、双龍、葡萄唐草文、<br>十二支、宝珠 |

## (2) 四神

登場は衣装蔵からですが、  
四神を持ってこようとした構想は、いつからでしょう。



# 全ての装飾、文様

地域安寧、商売繁盛、子孫繁栄

魔除けと招福、結界

祈りと感謝

・・・ 薬師如来とその属性

衣装蔵は、サフラン酒の装飾デザインにとって、  
大事な変化点だったのでは、ないか。

いつの時点で、饅絵蔵にあるような装飾にしようと  
構想したのか。

いつの時点で、庭園、離れ座敷にあるような、  
「魔除け・招福」で埋め尽くそうと構想したのか。

四神の導入がポイントと考えるなら、  
衣装蔵が変化点。

### (3) サフランの故郷、地中海・西アジア地域への憧れか

鬼瓦、葡萄唐草文様はいずれも、地中海・西アジア地域、エジプトを源流とされています。

サフランの故郷を想起させる、これらを蔵の装飾とし、更に、合わせ技として、薬師如来のアトリビュートである四神を追加して使ったのでは、という考えもあり得ると思います。

そして、その薬師如来のアトリビュートを追い求めた結果、10年後に建造の鍔絵蔵では、十二支も追加した、ということなのかも知れません。

鬼瓦の双龍(薬師如来のアトリビュート) 主屋

+

葡萄唐草文様(西アジア)

+

四神(薬師如来のアトリビュート)

+

十二支(薬師如来のアトリビュート)

衣装蔵

鋳絵蔵

## 2. 葡萄唐草文様の意味

中国では、実を多く付ける葡萄が子孫繁栄を象徴する吉祥文様。西方からもたらされた葡萄唐草文様は、異国の文様として珍重され、日本の仏教美術においても豊饒をあらわす吉祥文様とされた

「唐草」という実際の植物が存在するのではなく、葡萄などの蔓を図案化した模様がエジプトなどに始まり、中国を経て日本に伝わったものらしい。

この名前の由来は、「唐の国から伝わった」から、「からみ草」が略されたなどの語源がある。

## 「つる」はどういう意味か

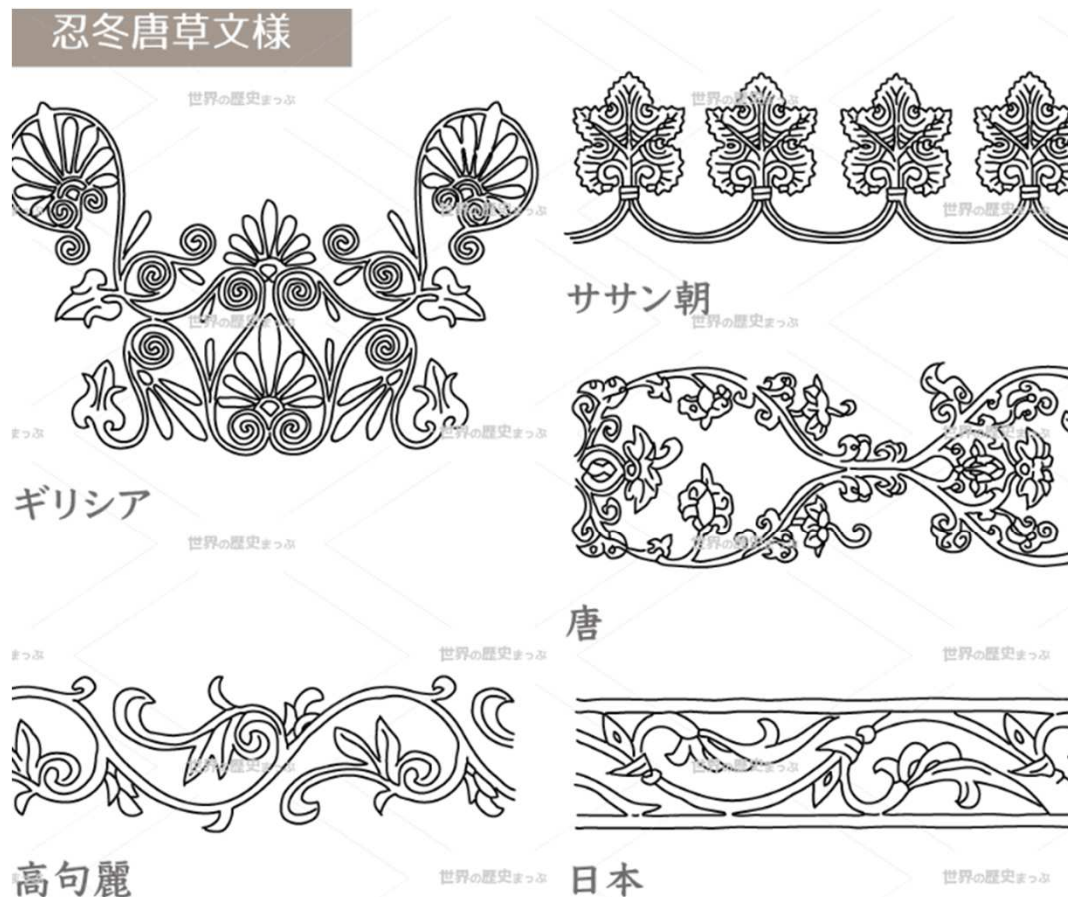
永遠、継続を意味する。

ブドウはあらゆる方向につるをのばして巻き付きながら生長することから、“他者を取り込み一緒に実を結ぶ”とされ、成功の象徴や縁起ものとして扱われている。また、ブドウはたくさんの実をつけ、子孫を残そうとする特徴によって「子孫繁栄」や「子宝に恵まれる」といった意味も持つ。

### 3. 源流のいくつか

7世紀・飛鳥時代の頃と推測される。法隆寺金堂に安置されていた仏教工芸品・玉虫厨子の蓮弁には、唐草文様の一つの『忍冬唐草』の施しが見られる。

\* 忍冬(にんどう)唐草  
= スイカズラ



花や葉のつるがからみあって連続する文様が唐草文様で、古代エジプトで始まり、ギリシア・ローマを経てササン朝や中国西域に伝わり、仏教美術の装飾文様として中国から朝鮮半島・日本へともたらされた。忍冬とはスイカズラのこと。

古代エジプトやギリシャを起源とするパルメット唐草も源流の一つ。





パルメットとは、扇のように花卉が開いた形の植物を模した文様とされている。

モチーフとなっている花には諸説があり、スイカズラ(忍冬)や、ロータス(蓮)、それにナツメヤシ。あしらわれる花や蔓の付け方により、全く異なる文様となる。

そして、地域や時代によりその起源となる花が違う。例えば、古代ギリシャでは、anthemion(アンテミオン) = スイカズラ(忍冬)の葉であり、古代エジプトでは、lotus(ロータス) = 蓮の花。

## 薬師如来の台座の図様について 薬師寺の高田好胤師

葡萄唐草文様の源流はギリシャ。

中框の周囲を囲む蓮の花を上から見て図案化した文様はペルシャ(ペルセポリス遺跡)。

中框中央の蕃神、異人形の彫刻はインドの太鼓腹像に共通。

～白鳳時代の文化が如何に世界各地の影響を受けていたかがわかる。

## 4. 幼い四神

鬼瓦に龍、そして、八枚の鰻絵には、東面に鯉の滝登りと鳥、北面に玄武と白虎を配しました。鰻絵蔵のような、四霊獣(青龍、白虎、朱雀、玄武)をもって東西南北の守護神とする考え方が、既に、しっかりと現れています。

はじめて作った鰻絵の一部に、あえて、将来の龍を予見させる滝を昇る鯉、そして明日の鳳凰を思わせる小鳥を配したところに、まだ五十代の仁太郎さんの、「もっと商売を伸ばすんだ、いま見ている」、という気持ちが見え隠れします。そして将来建造する蔵の鰻絵の図柄も、このとき既に決めていた、飛躍への覚悟としか、思えないのです。

衣装蔵の四神の姿が、龍に対する鯉、朱雀に対する小鳥など、幼い姿であり、仁太郎さんが将来の成長を期して、このような姿の制作を指示したと思われることからの発想です。詳しくは、「ガイドからのメッセージ」のリスト中の『もうひとつの比喩』に示しました。鏝絵蔵の鏝絵のデザイン、意匠を見ますと、私には、衣装蔵のデザインには、このような意図があったとしか、思えないのです。

直接の参照は、下記、

[/pdf\\_message/MfG\\_J\\_Metaphors\\_in\\_Kina-Saffron\\_Shu\\_buildings.pdf](/pdf_message/MfG_J_Metaphors_in_Kina-Saffron_Shu_buildings.pdf) で  
ご覧いただけます。

その他、[/pdf\\_message/MfG\\_J\\_Guidebook\\_Vol\\_2\\_Kote-E\\_Saffron\\_Shu.pdf](/pdf_message/MfG_J_Guidebook_Vol_2_Kote-E_Saffron_Shu.pdf)

## 5. 建築の特色

大正5年という時点で、究極の防湿構造を意図したと考えます。一度作った漆喰壁を、数十年ごとに塗り替えるという煩わしさを避けるため、漆喰壁を亜鉛メッキ鉄板でカバーし、しかも錆びにくい高純度の鉄板のトタン板にしたという、念の入れようです。衣装蔵のガイドでは、柱の密度を高めた耐久建築が目立ちますが、基礎がしっかりしていたという背景があると思います。間もなく110年が経過しますが、そんな昔に、このような基礎工事をやっていたことに感心します。その分野のエース級の技術者に頼んだのだと思います。

そのほか、「高床構造と通気口」では、通気口取っ手のサフラン酒のボトルと思いますが、ボトルを模したセンスのよさをお話ししたいと思います。